

陸連時報 三

2020
令和2年

4 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

2020年シーズンの抱負(強化委員会).....	166
2019年度日本陸上競技連盟U16ジュニアブロック研修合宿報告(指導者養成委員会 舟橋 昭太)	169
2019(令和元)年度 日本陸上競技連盟 競技運営委員会 全国競技運営責任者会議.....	173
20-30代のランニングライフとランニングウィーク.....	175
コミュニティで進化するランニングカルチャー.....	176
RUNNING DAY 開催報告.....	178
大会観戦ガイド.....	179
陸協NEWS.....	180
事務局からのお知らせ.....	182

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものですが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

2020年シーズンの抱負

強化委員会

■強化委員長 麻場一徳

2020年シーズン、いよいよ東京オリンピックを迎える。2013年に東京オリンピックが開催されることが決定し、ここに至るまでの強化策の集大成となる。

昨年行われたドーハ2019世界選手権では、ゴールドメダルターゲットである競歩種目の男子20km競歩、男子50kmにおいて金メダルを獲得した。医事委員会・科学委員会と連携しながら進めている暑熱対策を十分に活かし、最高の結果を取ることができた。マラソンを含め、これまで取り組んできた暑熱対策は順調に成果を挙げていると評価できる。あとは個人の特性、当日の気象条件に適用させられるかどうかという状況である。

同じく、ゴールドメダルターゲットの男子4×100mリレーでは、2大会連続となる銅メダルを獲得するとともにアジア記録を更新した(37秒43)。37秒4台は金メダルが見える水準の記録と想定していたが、アメリカ、イギリスがその水準を超えてきたことを考えると、東京オリンピックでの金メダルを目指すにあたっては、強化戦略のブラッシュアップが必要となる。

男子4×100mリレーの第4走者として銅メダルを獲得したサニブラウン・アブデル・ハキーム選手、男子走幅跳で8位入賞した橋岡優輝選手や女子20km競歩で7位入賞した藤井菜々子選手は、ダイヤモンドアスリートの修了生であり、東京オリンピックに向け立ち上げられた新しい強化策も形となりつつある。世界選手権では決勝進出を逃したが、女子やり投の北口榛花選手も、世界選手権後に2019年世界ランキング7位となる66m00の日本記録をマークし、オリンピックでも十分8位入賞を期待できるレベルにまで成長している。

また、ドーハ世界選手権では惜しくも入賞まで届かなかったが、男子400m、男子110mH、男子400mH、女子10000m、女子やり投など、あと一歩で8位入賞という水準で戦える選手が増えてきたことは、2020年の東京オリンピックに向けて収穫と言える。

2019年は10種目のオリンピック種目で日本記録が誕生した。今まで陸上競技は、他競技と比較して日本記録の数が少ないという厳しい評価も受けていたが、母国開催のオリンピックを控える中、多くの日本記録が様々な種目で誕生したことは好材料と言える。

スポーツ庁が定める競技力強化のための今後の支援方針(鈴木プラン)では、2019・2020年度はラストスパート期を迎える。「メダル・入賞」をターゲットとしつつも、「オリンピックの舞台に立つアスリートの最大化」も視野に入れつつ、オリンピック以降も継続的に競技レベルの向上を目指すことができる強化戦略を策定したい。

ポスト東京オリンピックを考えると、国がスポーツに充当できる予算は確実に変化することが予想されるため、今までと同じスタンスでの強化推進ではJAAFビジョンに定める、2028年世界TOP 8、2040年TOP 3を目指すことは難しいであろう。

時代にあったトップ強化を進めつつ、明日を担うジュニア世代育成の充実を図っていきたい。

2020年度の強化委員会の活動方針は下記の通り。

1) 東京2020オリンピックに向けた方針

- (1) メダル・入賞を一つでも多く
- (2) 舞台に立つ者(出場者)を一人でも多く

2) 2020年度の目標

- (1) 東京2020オリンピックでの成功(各カテゴリーが設定した目標の達成)
- (2) 東京2020オリンピックに向けたワールドアスレックス(以下「WA」という。)ワールドランキング制度対策
- (3) 東京2020オリンピック以降につながる中長期的戦略的強化計画の策定

3) 今後の具体的取り組み

- (1) 3本柱(男子リレー、男子競歩、男女マラソン)を中心としたメダル獲得プロセスの強化
- (2) 個人及び特別プロジェクトでの具体的強化プロセス強化競技者及び強化対象競技者に対するオリンピックに向けた強化サポートの充実
女子リレーの特別対策プロジェクトの推進
- (3) WAワールドランキング制度の研究と利用、周知徹底
 - ① 東京2020オリンピックにつながる戦略的な選手強化・海外派遣
 - ② 海外転戦のための拠点機能の整備
 - ③ 国内競技会カレンダーの整備とステータス向上への取り組み
- (4) 強化プロセスに直結する選考方法の立案
マラソングランドチャンピオンシップ(以下「MGC」という。)のように選考方法が強化と連動する仕組みづくりと目標の明確化
- (5) 競技者育成指針(JADM: JAAF Athlete Development Model)に基づくU20、U18の強化・育成施策の展開
- (6) ポスト東京オリンピックに向けた競技会戦略
MGCのような、競技会設定と強化が連動するような競技会(T&F、マラソン、競歩)のスタイルの検討

競技者育成指針・競技者育成プログラムに基づいた強化施策の展開については、2018年に「陸上競技の普及」と「競技者の育成・強化」の両面を見据え、日本における陸上競技者育成の方向性を具体的に示した「競技者育成指針」が定められた。また、その指針をもとに、日本の陸上競技者の育成・強化システムを最適化し、仕組み（ガバナンス）を構築するための競技者育成プログラムが策定された。

これらを拠り所とし、目前に迫る東京2020オリンピックだけに焦点をあてるのではなく、2020年以降に活躍が期待されるダイヤモンドアスリートやU20オリンピック育成競技者を中心とした次世代を担う競技者の、強化・育成を図るとともに、U20、U18カテゴリーの競技会のあり方、育成のプロセスを関係委員会、加盟団体、協力団体との連携を図りながら進めていくことが重要と考える。

これらの考え方を押さえつつ、ポスト東京オリンピックを見据えた新しいスタイルの競技会や強化のシステム構築に貢献していきたい。

■トラック&フィールドディレクター 山崎一彦

種目特化型とエリート育成の強化システム

2019年シーズンでは、ロードおよび長距離種目以外では、男子100m、110mH、4×100mR、走幅跳、走高跳、女子100mH、やり投、円盤投の計8種目で日本記録を更新した。私たちは東京オリンピックに出場するため、参加標準記録突破やターゲットナンバーを目指しているが、まずは記録の歴史を塗り替えるということが必要であったことから、多くの種目での日本記録は好材料であった。以前は走跳投ブロック体制であった3年前から種目特化型での強化体制を行い、種目の強化コーチとパーソナルコーチが連携して、競技成績を出してきた成果であると感じる。また、5年前より世界で活躍する国際人を養成するエリート育成システムであるダイヤモンドアスリートプログラムを立ち上げ、その修了生であるサニブラウン・アブデル・ハキームが2017年世界選手権200mで入賞、2019年世界選手権では、橋岡優輝が走幅跳で入賞した。さらには北口榛花が世界トップ8以上の記録をマークして、東京オリンピックの入賞圏内に入ってきた。また、私たちの悲願である東京オリンピックでの金メダル獲得へ向けて、男子4×100mRにおいても、世界主要競技会での連続メダルを獲得しており、これまでの強化戦略からの方法は間違っていないと考える。

昨シーズンからの強化方法と施策

東京オリンピックへ一人でも多くの参加選手を増やすために、早くからワールドランキング制度の対策を講じてきた。しかしながら、昨年の世界選手権から導入される予定であったワールドランキング制は、度重なるレギュレーションの変更により、東京オリンピックからの導入となった。私たちはそれらに振り回されながらも、早くからワールドランキング制につい

て情報分析をし、強化競技者にも周知する努力をした。また、日本グランプリは陸連事務局および大会主催者である各都道府県陸協の協力により、アジアパーミットなどの大会格付けを上げていただいた。そのおかげで、我が国の競技者は、現時点で他諸国競技者よりも総じて記録ランキングよりもワールドランキングの方が高い状況を作ることができた。さらにはWAの18ヶ月前まで競技会が100%有効というルール変更のおかげで、ある程度有利な状況を保持することができている。

ワールドランキングで上位を保持するための分析結果では、室内世界選手権およびエリア室内選手権で入賞している競技者は、アウトドアの成績以上に軒並みワールドランキングが上位になっていた。そのため、東京オリンピック参加当落線上にいる競技者には、グレードの高い室内競技会参戦を促進させる方針をとった。大阪陸協にご協力いただき、急遽室内日本選手権を開催していただいた。しかしながら、コロナウィルスの感染拡大の関係で、中国で開催予定であった室内アジア選手権は中止に、室内世界選手権は来年へ延期となった。これらは、戦略的派遣を行う予定であった私たちににとっては大打撃となった。すでに応急措置として、3月までの海外室内競技会および屋外競技会への参加への金銭的サポートを行えるようにしている。今後も不測の事態が起こった場合の裁量策を迅速に取れるようにしていきたい。

シーズンまでの方向性

東京オリンピック金メダル獲得を目指す男子4×100mRは、セイコーゴールドグランプリでのテストレースを行う予定としている。またオリンピック本番で、最良の結果を出すためには、リレー種目と個人種目の兼ね合いについて関係者と調整を図っている最中である。男子4×400mRにおいては、JSC次世代ターゲット事業の強化対象となり、3回のアメリカUSCへの合同トレーニングを終え、参加資格獲得へ向けたタイムトライアルをテストイベントで行う予定である。4月中旬の吉岡隆得記念陸上（出雲）では、4×400mRにおけるレース前半のスピード化に対応した300mの結果を考慮した選考とする新たな試みを実施する。女子短距離については、リレープロジェクトを立ち上げ2シーズン目となるが、両リレーともに5月のタイムトライアルに向けて個々の実力を上げていく努力をしている。

個人種目に関しては、従来通り種目特化型とカテゴリーを区別して強化していることから、3月、4月は個人強化トレーニングを中心に行う。また室内アジア選手権および室内世界選手権のキャンセルのために代替え競技会として、オーストラリアおよび北米での競技会参戦を一部の種目で予定している。我が国では、4月中旬から日本グランプリシリーズを中心とした全国規模の競技会が開催予定であるが、コロナウィルスの影響はどのようになるか不測ではあるが、まずは最終選考会である日本選手権までに強化競技者に不利益が起こらないよう、事態に備えて落ち着いて対応をしていきたい。

■長距離・マラソンディレクター 河野 匡

2020東京オリンピック・パラリンピック陸上競技開会まで150日。新型コロナウイルス（COVID-19）感染が終息への目処が立たず、ワールドランキングポイント獲得のために重要な大会と位置付けていた世界室内、アジア室内が延期、中止になるなど強化計画に支障が出始めている。選手、コーチ、強化スタッフは自国開催に向けて3年半来る日のために心血を注いできたが、仕上げ時期におけるこの状況はあまりにも酷と言うほかない。とにかく早期の正常化を願うばかりである。

マラソン代表選考は、MGCファイナルチャレンジ終了後に内定する。選手、候補選手（補欠）男女各5名には札幌開催に向けて悔いのない万全のサポートをしていきたい。

長距離・マラソンの4月からオリンピックまでの大まかな流れは以下の通りである。

〈長距離〉

- 2020日本グランプリシリーズ、各記録会及び ※国際競技会
- 2020日本選手権10000m（5/10：国立競技場）→代表内定
- 10000m内定者：オリンピックに向けて各選手トレーニング（個別強化）※サポートプログラム実施
- 2020日本選手権5000m（6/25～6/28：大阪）→代表決定及び追加代表
- 代表選手個別強化 ※高所トレーニング、事前合宿地等の拠点活用

〈マラソン〉

- オリンピックマラソンコース視察（確定後適宜：札幌）
- オリンピックに向けて各選手トレーニング（個別強化）※サポートプログラム実施

世界陸連（WA）ワールドランキングポイントの10カ月～12カ月前のポイント減算がなくなり、10000mは2019年1月1日、5000mは2019年5月1日から2020年6月29日までのポイントがそのまま有効になる。

一人でも多くの選手を出場させるためにタイムリミットまで最善を尽くすつもりである。日本グランプリシリーズをはじめ、各大会には開催にあたってご理解、ご協力頂きこの場を借りて感謝申し上げます。

各カテゴリーにおける現状とオリンピックに向けての展望は、

§ 男子長距離

5000mは参加標準記録である13分13秒50の突破者はいない。2月25日現在のワールドランキング（1カ国上位3名）では松枝博樹（富士通）が日本人トップの1142ポイントで30位。田中秀幸（トヨタ自動車）44位、服部弾馬（トーエネック）49位と42名まで与えられる出場権のボーダーライン上に位置している。シーズンが始まったばかりでポイントの動きはこれからだが、1150～1160ポイントは必要だと予想している。前述の3名に加え、昨年室内日本記録をマークした遠藤日向（住友電工）らが代表権獲得を狙えそうである。

10000mも参加標準記録27分28秒00の突破者はいない。田村和希（住友電工）が1160ポイントで24位。出場権内（27

名）にいるが、5月の日本選手権でポイントの上乗せを図りたいところである。鑑坂哲哉（旭化成）が1135ポイントで35位。10000mは2レース（5000mは3レース）の平均ポイントで算出されるので1本1本が大事になってくる。両種目共にもうひと踏ん張りすれば代表に手が届く位置にいるので、残されたチャンスを生かして是が非でも代表になって貰いたい。

§ 女子長距離

5000mでは15分10秒00の標準記録を田中希実（豊田自動車織機TC）、廣中瑠梨佳（日本郵政G）、新谷仁美（積水化学）の3名が突破している。20歳の田中は昨年のドーハ世界陸上で決勝に進出し15分00秒01と14分台に僅かに及ばなかったが14位。また19歳廣中も12月に15分05秒40をマークしてオリンピック代表候補に名乗りを上げた。若い二人には福士加代子（ワコール）の持つ14分53秒22の日本記録突破及び、入賞争いに加わる成長を期待したい。

10000mでは新谷が一昨年に競技復帰をして、昨年はドーハ世界陸上で入賞争いをしての11位。1月にはヒューストンハーフマラソンで1時間06分38秒の日本記録で優勝。2月にはオーランドで5000mを15分07秒02と標準記録を突破しての自己記録更新。スタミナ、スピードともに進化してきている。この種目の日本記録更新も現実味を帯びてきた。ケニア、エチオピア勢に対抗するのは容易ではないが、戦うためのプロセスをプラン通りに実行してきているので楽しみである。標準記録にあと一步に迫っている岡本春美（三井住友海上）、山ノ内みなみ（京セラ）、鍋島莉奈（日本郵政G）らにも期待したい。

記録的には14分50秒、30分40秒以内が入賞争いへの必要条件だと考えている。激しい代表争いの中で各選手の成長を望みたい。

§ 男女マラソン

昨年9月のMGCレースで中村匠吾（富士通）、服部勇馬（トヨタ自動車）、前田穂南（天満屋）、鈴木亜由子（日本郵政G）の男女各2名が代表に内定した。

ファイナルチャレンジではMGC 3位に終わった大迫傑（NIKE）が東京マラソンで自身の持つ日本記録をさらに更新する2時間5分29秒をマークして4位に入った。MGC創設時に掲げた目標設定記録2時間5分30秒を僅か1秒ではあるが突破したことは特筆すべき結果である。

女子ではMGC 4位に終わった松田瑞生（ダイハツ）が自己記録の1秒速い2時間22分22秒のファイナルチャレンジ設定記録を大きく上回る2時間21分47秒で大阪国際女子マラソン優勝。男女ともにファイナルチャレンジで設定記録を更新するという強化としてはこの上ない結果を出してくれた選手に最大級の賛辞を送りたい。

マラソン開催都市が東京から札幌に移転しコースの詳細はまだ決定していないが、代表に選ばれた選手、専任コーチ、そしてサポートスタッフと共に万全の準備で本番を迎えたい。選手は「一つでもいい順位を」、そしてスタッフは「100%の状態ですスタートに立たせる」ことを目標に戦う所存である。

2019年度日本陸上競技連盟U16ジュニアブロック研修合宿 報告

指導者養成委員会 舟橋昭太

日本陸上競技連盟が主催するU16ジュニアブロック研修合宿が、12月～1月にかけて9ブロックで選手1905名、指導者486名（有資格者79名）の参加を得て開催された。ブロック合宿の目的としては、①タレント発掘・競技力の向上②指導者育成（有資格者の養成）③多くの中学生が陸上競技をすることで楽しさと喜びを感じることを三本柱として、安全にそして有意義な合宿にしてもらいたいと考えている。

各ブロックの参加者は、明るく元気に目を輝かせて練習に臨んでいた。若手指導者も多く、メインコーチの指導をメモや動画を撮りながら指導法を学んでいた。指導者の方々には、このブロック合宿を研鑽の場と位置付け、指導力向上の機会として活用していただき、各都道府県に戻った際にはリーダーとして他の指導者の皆さんを牽引していただきたいと考えている。

今後、陸上競技の指導者養成においては、全ての指導者が資格を持って指導現場にたっていただく方向に進んでいる。今回の合宿においても有資格者は北海道8名、東北12名、関東17名、北信越9名、東海11名、近畿12名、中国0名、四国2名、九州8名、合計79名で資格保有率は全体の16.3%で先年よりも多少多くなった。中学生を指導する現場では、体罰・暴言・セクハラ・鉄剤注射など様々な問題が未だにある。これらを解決するためには資格を取り、指導者自身が多くの研修を積み、多くの指導方法や色々な知識を得なければならないと考える。そのために資格を持ち選手ファーストの精神で指導にあたらなければならない。日本陸連としても多くの中学生指導者に資格を取ってもらうためにシステムの改善や内容を精査していきたい。

ブロック	北海道	東北	関東	北信越	東海	近畿	中国	四国	九州
参加都道府県	北海道	青森・岩手 宮城・秋田 山形・福島	茨城・栃木 群馬・埼玉 千葉・東京 神奈川・山梨	新潟・長野 富山・石川 福井	静岡・愛知 三重・岐阜	滋賀・京都 大阪・兵庫 奈良・和歌山	鳥取・島根 岡山・広島 山口	香川・徳島 愛媛・高知	福岡・佐賀 長崎・熊本 大分・宮崎 鹿児島・沖縄
日程	1/8～9 (水)～(木)	12/8～9 (土)～(日)	12/26～28 (水)～(金)	12/22～24 (土)～(月)	1/5～6 (土)～(日)	1/12～14 (土)～(月)	12/26～28 (水)～(金)	12/22～24 (土)～(月)	12/22～24 (土)～(月)
開催地	札幌	宮城	山梨	長野	愛知	和歌山	広島	高知	熊本
陸連派遣委員	舟橋昭太	ハニカット 陽子	森健一	沼澤秀雄	舟橋昭太	秋元恵美	田中悠士郎	舟橋昭太	舟橋昭太
参加人数 (選手)	130	291	392	197	160	253	102	190	190
参加人数 (指導者)	41	58	99	60	57	68	23	40	40
参加者合計	171	349	491	257	217	321	125	230	230
有資格者数	8	12	17	9	11	12	0	2	8
有資格者の割合	19.5%	20.7%	17.2%	15.0%	19.3%	17.6%	0.0%	5.0%	20.0%
前年有資格者	4	7	11	9	8	4	0	3	4
前年有資格者の割合	19.0%	11.9%	11.3%	17.3%	17.4%	6.8%	0.0%	10.0%	14.3%

【北海道ブロック】

北海道ブロックは、1/8～1/9に、きたえる、セキスイハイムアリーナ、ホテルハシモトを使用して開催した。参加者は選手49名、指導者21名であった。札幌市強化選手、道央陸協強化選手と合同で練習を行う場面も作り交流できた。

今年度はメインアリーナを1日目半面、2日目全面を使用し、コントロールテストや基本的な動き作りを中心とした内容を行った。2日目は場所が狭くスペースを有効活用するために各ブロックで調整し、工夫して練習ができた。2日目はスペースに余裕があり、各ブロックで動きのある練習も十分に行うことができた。各選手が学校に戻ってからも、継続できる練習内容であった。中長距離はセキスイハイムアリーナに移動しペース走、インターバル走などで走りこむことができた。今回は参加指導者が多く、選手一人一人に十分なアドバイスを与えることができた。

1日目の昼に、明治製菓の栄養講習、4時からヨガの講習を行った。今回、回転投の大垣 崇先生に来ていただき、強化選手・指導者ともに指導していただいた。



(北海道：山岸 正直)

【東北ブロック】

東北ブロックは12/8～12/9の日程で実施した。会場のひとつめばれスタジアム宮城は本競技場はオリンピックのため改修工事で使用できなかった。しかし、補助競技場、投てき場はもちろんのこと、屋内練習場も充実しており、天候に左右されずに運営することができた。東北地方でこの時期心配される降雪や積雪もなく、好天に恵まれ、充実した練習を実施することができた。比較的積雪の少ない宮城県に会場を固定し、宮城県スタッフを中心に各県スタッフの協力の下、「東北は一枚岩」を合い言葉に開催できていることに感謝したい。



(福島：二瓶 励)

【関東ブロック】

関東ブロック合宿は、12/26～12/28まで2泊3日の日程で、群馬県の正田醤油スタジアムをメイン会場として開催された。インフルエンザ等で、やむを得ない欠席者が数名出たものの、男子209名、女子183名、合計392名の選手と、99名の指導者が参加した。短距離男女、中距離男子(400、800)、中長距離男女、ハードル男女、走高跳男女、棒高跳男女、走幅跳男女、砲丸投男女と、専門種目ごとに分かれて練習に取り組んだ。指導者は、各都県から選出されたメインコーチの先生方。都県の枠を超えて、相談をしながらより良い練習を創り上げようとする姿が印象的であった。また、各都県の代表に選出されるだけあって、選手たちもやる気と熱気に満ち溢れており、指導をどん欲に吸収していた。

1日目は、今にも雨が降り出しそうな曇天、2日目は雪やみぞれ、3日目は、上州名物の空っ風と、コンデショとしては決して恵まれたとは言えない中での練習となったが、メインコーチの先生方の工夫と選手たちのやる気のおかげで、すべての日程をほぼ順調にこなすことができた。開催に向けて、ご尽力いただいたすべての方に感謝いたします。ありがとうございました。



(群馬：小池 和幸)

【北信越】

北信越ブロック単独開催となって3年目、今年度から新潟県での開催となった。北信越5県から選手197名、コーチングスタッフ60名が新潟市のデンカビッグスワンスタジアムに集い、2泊3日の合宿を実施した。懸念された天候不良による練習の制約をほとんど受けることなく、比較的恵まれた天候の下で3日間の日程を計画どおり進めることができた。各ブロックのコーチは北信越各県で優れた実績を残してきた指導者が務め、普段の練習では受けることのできない練習に意欲的に取り組む姿が見られ、選手、スタッフにとって大きな刺激となった。会場のデンカビッグスワンスタジアムは室内練習場をはじめ、荒天でも対応できる施設が備わっており、施設職員のバックアップもあって充実した冬季の合宿練習となった。合宿初日の夜にはスタッフの懇親会を開き、シーズン中とは違ったりラックスした雰囲気の中で情報交換や思い出話に花を咲かせた。また、合宿の最終日には全参加者が円陣を組み、「北信越は一つ」を叫んで交流を深めた。競技力向上とともに交流の輪も広げることができ、選手は来シーズンの北信越大会・全国大会での再会を誓い合い、合宿を終えた。



(新潟：五十嵐 陽介)

【東海】

1/11～1/12に開催したU16東海ブロック研修合宿。東海4県のトップレベルの中学生160名が集まった本合宿は、今年度全中の舞台である競技場で本番を想定した熱い練習会となった。合宿当日は伊勢神宮初参りの交通規制のため、各県ともにゆとりを持って集合していただいた。開講式では、初めての試みとして、チーフコーチ紹介を軽快な司会の話術によって盛り上げることができた。小雨の中行われた練習会は、天候とは裏腹に、コーチたちの熱意と選手たちの意識の高さで、終始、白熱し

たものとなった。三重全中本番の年のスタートにあたり、東海地区の団結力を再確認した合宿でもあった。東海4県は“OneTeam”でこの夏を盛り上げていくことを誓い、全行程を終えた。合宿開催にあたり、日本陸連からのご支援を感謝申し上げると共に、遠方からお越しくださった舟橋昭太様には厚く御礼を申し上げたい。



(三重：三輪 亮介)

【近畿】

今年度は、近畿各府県より指導者・選手総勢316名のエントリーがありました。毎年のことですが、この時期の開催となると、直前に数名が体調不良によりキャンセル、合宿開始後にも数名体調不良になり帰宅することもありましたが、合宿を通じて大きなけがやトラブルもなく3日間を過ごし、参加者は来年のシーズンに向け、充実した時間を過ごせました。

合宿中は、この滅多にないチャンスを自分の競技に生かすべく、選手の間には積極的に取り組み、真剣さの中に活気もあり、非常に充実した合宿になりました。また、コーチの先生方もそんな選手を目の前にし、熱く指導していただき、選手の間々にたくさんのものを還元していただきました。さらに、各府県の引率の先生方も、こんな機会はなかなかないので、ここぞとばかりに交流を深め、今後の自分たちの学校の選手の指導に当たろうとされている姿もたくさん見受けられました。多少、雨も降ることもありましたが、コーチの先生方の工夫もあり、しっかりと練習メニューが消化でき、選手たちも充実の2泊3日を過ごせたのではないかと思います。

2泊3日の少ない時間の中での合宿でしたが、選手はもちろんのこと、指導者にとっても本当に充実した時間になったのではないかと思います。この合宿だけで来年の結果の全てが決まるわけではありませんが、今後の各選手の練習に取り組む姿勢のきっかけを与えることがで

きたのではないかと思います。来年度の近畿ブロックの選手の全国・近畿、さらには各府県での大会での健闘の一助になってくれるものと感じています。



(大阪：松岡 晃)

【中国】

中国ブロック研修合宿は、12/26～12/28にコココーラウエスト広島スタジアムで開催し、生徒102名、指導者23名が参加した。今年度は短距離、走高跳、走幅跳、砲丸投を実施。指導者は中国地区内各県の指導経験豊富な先生方に務めていただいた。昨年、この研修合宿に参加した生徒で日本一になった選手がいたり、今回参加した選手の中には全国入賞をした選手もあり、選手たちはよい刺激となり、意欲的に取り組むことができた。また、株式会社明治の協力も得て、栄養についても考えることができ、収穫のおおい研修合宿となった。次年度の中国大会、全国大会での再会を約束し、3日間を締めくくった。広島の先生方をはじめ、ご尽力をいただいた方々に感謝申し上げます。



(島根：奥井 克己)

【四国】

四国ブロック研修合宿は、12/21～12/22にニンジンアスタジアムを使用して開催した。参加者は選手190名、指導者40名であった。

本年度は愛媛県開催1年目であり、愛媛県の中学校・高校の指導者が中心となって研修合宿を進めた。選手の中には全国大会入賞者も参加しており、各県代表の1、2年生にとってよい刺激となった。「四国は一つ」を合言葉に各ブロックで練習に励み、来シーズンに向けて意識を高めた。また、栄養講習も実施し、自己の強化につなげることができた。合宿の最後に雨が降ったが、ほぼ予定通りに練習を消化できた。次年度開催も決定しており、更に工夫して運営していきたい。



(愛媛：矢野 隆行)

【九州】

九州ブロック研修合宿は、12/26～12/28に一昨年の全中会場となった「えがお健康スタジアム」を練習会場に、2つの宿舎に宿泊して開催しました。今年で7年連続熊本での開催でした。参加者は選手190名、指導者29名、視察指導者12名でした。日本中体連の舟橋委員長も駆けつけていただき、質の高いハイレベルな指導を3日間、九州トップレベルの指導者の先生方にやっていただきました。



(熊本：沢田 修)

2019(令和元)年度 日本陸上競技連盟 競技運営委員会 全国競技運営責任者会議

2020年2月15日(土)、16日(日) 味の素ナショナルトレーニングセンター

第1日(2月15日)

開会あいさつ

尾縣 貢 専務理事

・いよいよオリンピックイヤー。オールジャパン態勢でオリンピックの盛り上げをお願いしたい。

事務連絡

羽田 雄一 幹事

・名札、短冊、配布資料の確認、冊子販売について

公認審判用ウェアについて

三宅 聡 事務局員・青山商事株式会社 後藤 康文
・よろしくお願ひしたい。

・公認審判員ウェアの販売について、過去3年間、全国で1600名が購入。今回も年2回の販売の機会を設けた。1度目は4~5月、2回目は9~10月。

2020年度競技規則修正提案

片岡 裕介 委員

・IAAFからWAに組織名が11月1日に変更となった。ルールブックもルールの条文番号の体系が変更となった。

・警告と失格の対象を、個人に加えリレーのチームを対象とした。個人の警告数とリレーの警告数は累積しない。

・ナンバーカードについては、アスリートビブスまたはビブスと呼ぶこととした。

・スタートについて、スターターの裁量によってレベルに合わせて適切に運用されているため、国内規定を削除してもよいだろうという判断をした。

・直線競走について、逆走を認めることにした。

・リレーについて、解釈の変更。WAに問い合わせたところ、バトンパスが終わるまでは前走者、次走者が完全にバトンを持続したら受け手がバトンを持つ唯一のものとなるという見解。国内の解釈と異なるので、解釈を競技規則に合わせることにした。

【靴に関して】

・競技用の靴について、4ヶ月前に市販されたものが競技会で使用可能となる。

・競技用の靴底の厚みについて、3種類となる。今までの走幅跳と走高跳の13mm、スパイクありの30mmに加え、スパイクのない40mmとなる。

競技会実施報告(諸問題発生事例)

・日本選手権：福岡、IH：沖縄、全中：大阪、国体：茨城、U20/18：広島からの報告があった。

国際競技会・講習会報告

①WR(世界リレー)

関 隆史 幹事

・非常に短い準備期間でなんとか乗り切ったというのが実情。

②世界陸上競技選手権大会

鈴木 一弘 委員長、関根 春幸 副委員長

・カタールドーハ、非常に暑かった中で行われた世界陸

上だったので、非常に問題もあった。

・TICを視察。非常に狭い部屋の中で、狭さを解消するために、器具の持ち込み検査はコールドルームでやるなど分散して工夫していた。

③アジアマラソン選手権

関根 春幸 副委員長

・片側4車線を全車線規制という中での実施がうらやましかった。また、100mごとに医科大学の学生が立っていて、何かあった場合対応するように準備されていた。

④AAA(Area Level)スターターセミナー報告

関 隆史 幹事

・世界リレー前に2日間の日程で実施。アジア各地から7名【うち日本から3名(+オブザーバー3名)】が参加。国際スターターのアラン・ベル氏が講師。スターターが、全競技者の確認ができるようにすることが重要。また、英語力の向上が大切。

施設用器具委員会報告

高沼 正利 施設用器具副委員長

・普及、ウェルネス陸上の実現ため、4種ライト(4種L)を設置、100m逆走の取り扱い、障害物の対応、兼用サークルの表面仕上げ、300mHマーク、ブレイクラインマーカーの変更、道路競走路に関する注意など説明。

NTO研修状況報告

赤峰 俊彦 幹事

・2019年に女性限定、ロード、英会話ができる方のNTO試験を実施した。5月2,3日にバラ、5月5,6日にオリのテストイベントを国立競技場で実施予定。

SISを使用する競技会での注意点について

関 隆史 幹事

・オートリコールが鳴ったから、全てが不正スタートという訳ではない。現在、ほとんどのSIS装置は「変化量検出方式」となっている。波形図の見方、判定について、SISのサブモニターを手元に置く、事前テスト、スターティングブロックの運搬、など注意点の他、実際のレース動画と波形図を見比べながら8つの異なる事例を検証した。

抗議と上訴について

関根 春幸 副委員長

・国際ルールと国内ルールの違い、抗議の流れ、抗議を受け付ける場所、リザルトに発表時間の確認、抗議結果の伝達方法、上訴について、抗議の対応について等を説明。

鹿児島国体について

梶田 竜之助 事務局員

・資料をもとに説明。特に新種目についての出場資格と番組編成の原則について説明。

事務連絡

羽田 雄一 幹事

・明日の集合時間、場所の説明等。

第2日(2月16日)(分科会A)

①公認競技会開催申請 鍋島 太一 委員

・2019年度の諸問題について、申請の変更点について、競技場の公認・検定に関する情報の送付、確認。公認競技会規程の確認。中止の際の報告等。

②公認記録申請について 岩脇 充司 委員

・記録申請に必要な書類について、申請までの期日について等を説明。

陸上競技マガジン 高橋 克実氏

・申請についての具体的な問題点や2019年度の課題について説明。

③日本記録の申請について 岩脇 充司 委員

・日本記録の申請について、次年度は多くの日本新記録が予想されることから、改めて注意点について伝達をした。

④ワールドランキング対応について 井上 博行 委員

・2020年度も都道府県選手権以上の大会ではワールドランキング対応をお願いしたい。(ローマ字氏名・生年)さらに有力選手が出場する大会でもぜひ対応をご検討いただきたい。また、申請の際の注意点について伝達。

⑤広告規程 協議 杉本 太郎 委員

・広告規程の修改正について、内容が二つに分けられた(①衣類及びアクセサリー、②Events)。大会規模によっても(①世界選手権、オリンピック、②地域選手権、③各国の選手権等)異なる。2020年度の運用・修改正の方針について。今年度は従来通りの規程で運用する。但し、GGP、マラソンのラベリングレースについては、国際規格も許容(ダブルスタンダード)することで運用をお願いする。

(分科会B)

①公認審判員昇格審査結果 町田 紀子 幹事

・昇格候補者審査を2020年1月18日(土)に実施した。681名の申請者の内661名を昇格候補者とした。対象年齢を5歳引き下げたため昨年よりも人数が2.3倍となった。
・講習会、競技会回数の不足、陸連未登録のため不合格者が出た。

②JRWJセミナー報告 関根 春幸 副委員長

・不合格に対する問い合わせが多かった。11月実施の合格者は0であった。競歩審判員としての技術は高い。それ以外の競歩に関する競技規則もきちんと習熟して欲しいと考えている。

③リレーに関する確認事項 青柳 智之 委員

・バトンパスの定義についての、ルールの明確化について説明。また、修改正の背景について説明。世界でメダルを狙うチームがある国として国際ルールと解釈が違っているかという部分でもこの時期

での解釈の変更の理由の一つとなった。

・国内解釈の見直しについて、バトンパスが完了するまでは受け手は「保持者」ではない。

・リレーにおけるYCの扱いについて「リレーチーム」が追加された。様々な場面でのYCの扱い、その後の出場についての解釈について共通理解した。

④オリンピックマニュアル・ハンドブック進捗状況

関 隆史 幹事

・オリンピックマニュアルは持ち運びができるように、A5サイズを予定している。マラソン・競歩については、別冊とする。

・ハンドブックにオリンピックマニュアルの一部掲載する予定、また、本文やコラムを一部変更。

⑤JTOトラブル事例 赤峰 俊彦 幹事

・今年度トラック&フィールド27大会、ロード22大会に派遣。派遣の中での報告には、細かなトラブル、商標関連、不正スタート関連、抗議対応、ロード種目特有のトラブル、など多岐にわたっている。実際のトラブル事例について、対応を共通認識した。

⑥C級審判員制度の導入 本橋 郁子 委員

・少子高齢化による審判員の減少、若い人材の確保を求める声が多いため、導入の方向で検討を進めている。陸上競技への関わり方の多様性(競技者・応援・手伝いだけでなく審判員としての関わりもある)を高校生に知ってもらいたい。基本的な枠組みは陸連で作成するが、加盟団体の裁量に委ねる部分も出てくると考えている。今後、条件整備・講習テキスト作成等を進めていく。

(全体会) 分科会報告

関根 春幸 副委員長・岩崎 義治 副委員長

・それぞれの分科会での決定事項、分科会の概要を発表。オリンピック・パラリンピック準備状況

鈴木 一弘 委員長

・競技役員の編成について、競技ボランティアについて、学生コラボレーターについて、テストイベントについて、輸送について、新国立競技場について、W-up会場について等説明。

全体質疑応答

Q (JTO:長谷川) ピブスのサイズの変更詳細。

A (関根) 新規規格は、縦16cm×横24cmが最大。事情に応じて適宜変更していただいて構わない。

事務連絡 町田 紀子 幹事

・問い合わせ先、冊子販売、昼食、名札回収等。

閉会あいさつ 鈴木 一弘 委員長

・WAがEPで工夫し、普及活動も盛んである。それに伴い、ルールの変更もある。誰が見てもはっきりわかるルールにしなければファンが逃げていくので、いろいろ情報共有をしていきたい。

New Generation

Connection with Millennial Runners through Running Week 2019

20-30代のランニングライフとランニングウィーク

2018年11月にJAAF RunLinkが発足してから、2019年6月のRunning Week 2019開催に至るまでの約半年。私たちは、大会主催者、企業、行政など、ランニングに関わる様々な方の声に耳を傾けてきました。今までの日本陸連の役割は、世界陸上やオリンピックで結果を出すことでしたがJAAF RunLinkはすべての人がすべてのステージにおいて陸上競技を楽しむ環境をつくるという「ウェルネス陸上」の理念の実現に向けて発足したプロジェクトです。そこで、日ごろからライフスタイルの一環としてランニングを楽しむ、いわゆる市民ランナーと呼ばれてきた人たちのことを、まずは知るところから始めることにしました。

そこで見えてきたひとつの課題は、「20代、30代のランナーとの接点」です。現状、東京マラソンを含め、マラソン大会出場者の年齢層は40～50代が大半を占めています。男女比は男性が7割程度の状況です。大手スポーツブランドが主催するランニングイベントでも、若い年代の集客に苦勞をしていると聞きました。

一方、年1回以上のジョギング・ランニング人口は、2018年時点で約964万人。(笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査報告書」)年代別に見ると20代、30代が最も多く、20代は女性のほうが実施率が高いという状況です。つまり本来であれば、ボリュームゾーンである20代、30代がもっとランニングイベントに参加していてもおかしくないのです。

また、フルマラソン完走者は約37万人。(アールピーススポーツ財団「全日本マラソンランキング」)マラソン大会は1万人以上の巨大イベントも数多くあり、多くの人がランニング=マラソンと捉えているのではないのでしょうか。しかし、「ランニング人口」という大きな括りの中では、「マラソン」に出るランナーは全体の4%程度に留まるのです。つまり、世の中のランナーたちは「正しい走り方を身につけてマラソン大会で記録をねらう」こと以外にも、何か別の体験や情報を求めているのではないかと、思うことです。

もうひとつ、おもしろい動きも見えてきました。最近では20代、30代のランナーを中心に「ランニングコミュニティ」が多く見られるようになってきていたのです。ランニングコミュニティとは、仲の良いランナー同士で集まって走る活動をしている人

たちのことです。その中には「走ってから食事や乾杯を楽しむ」といった活動も多くみられ、これはまさに、JAAF RunLinkが提唱する「Fusion Running」(ランニングを副次的要素と結びつけて楽しむこと)の考え方に通じるものです。実際に彼らの声を聞いてみると、「走った後にみんなでお喋りしたり、ご飯を食べたりする場が欲しい」「自分たちでイベントを企画してみたい」「かっこいいフライヤー作りたい」といったように、やはり「マラソン大会」を目指す以外の視点を持っていました。そこでRunning Week 2019を、「ランニングコミュニティ」と「Fusion Running」をテーマに、大会主催者や企業・団体の皆さまにも新しい視点のヒントを提供できるようにしたいと考え、コミュニティを主役にすることにしました。

また、以前JAAF RunLinkアドバイザーの堀江貴文氏からも「仲間内でのランニング」というキーワードをいただき、カル

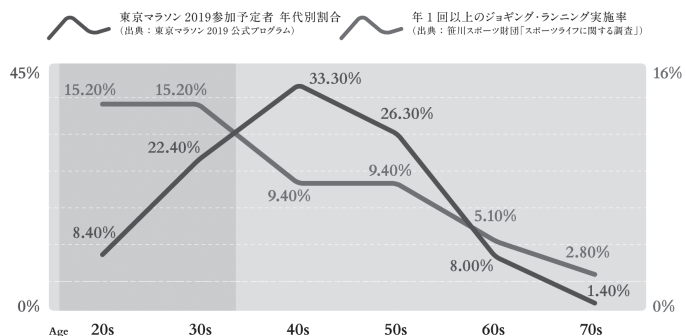
チャーをさらに広めていくには「(ランニングを題材に)大喜利をさせることが大事」というアドバイスがありました。そこで、Running Week 2019では「Fusion Running」に基づいた「ランニング×○○」という考えのもと、銭湯のラッピングやブックフェア、音楽ライブの開催や、地ビールとのコラボなども実現。これらはすべて、ランニングコミュニティと一緒に大喜利をしながら作り上げたものです。

今回開催されたイベントのひとつは、決して規模の大きなものではありません。要素を切り出せば、渋谷のような都会でなくても、どこでもできるものばかりです。

単なるお楽しみのイベントではなく、ランニング業界に新たな風を吹かせるきっかけになるような機会になることを願って、これからも、JAAF RunLinkとして、ランニング人口の裾野の拡大を目指して試行錯誤していきたいと思います。

ジョガーとマラソン大会参加者の属性の違い

マラソン大会の参加者は40代～50代がボリュームゾーンであるのに対して、年1回以上ジョギング・ランニングを行う人口においては、特に20代～30代が多い。



(注:グラフはデータをもとに独自に作成。20歳以上のみを抽出。80歳代は70歳代以上に含む)

Community Changes Running Culture

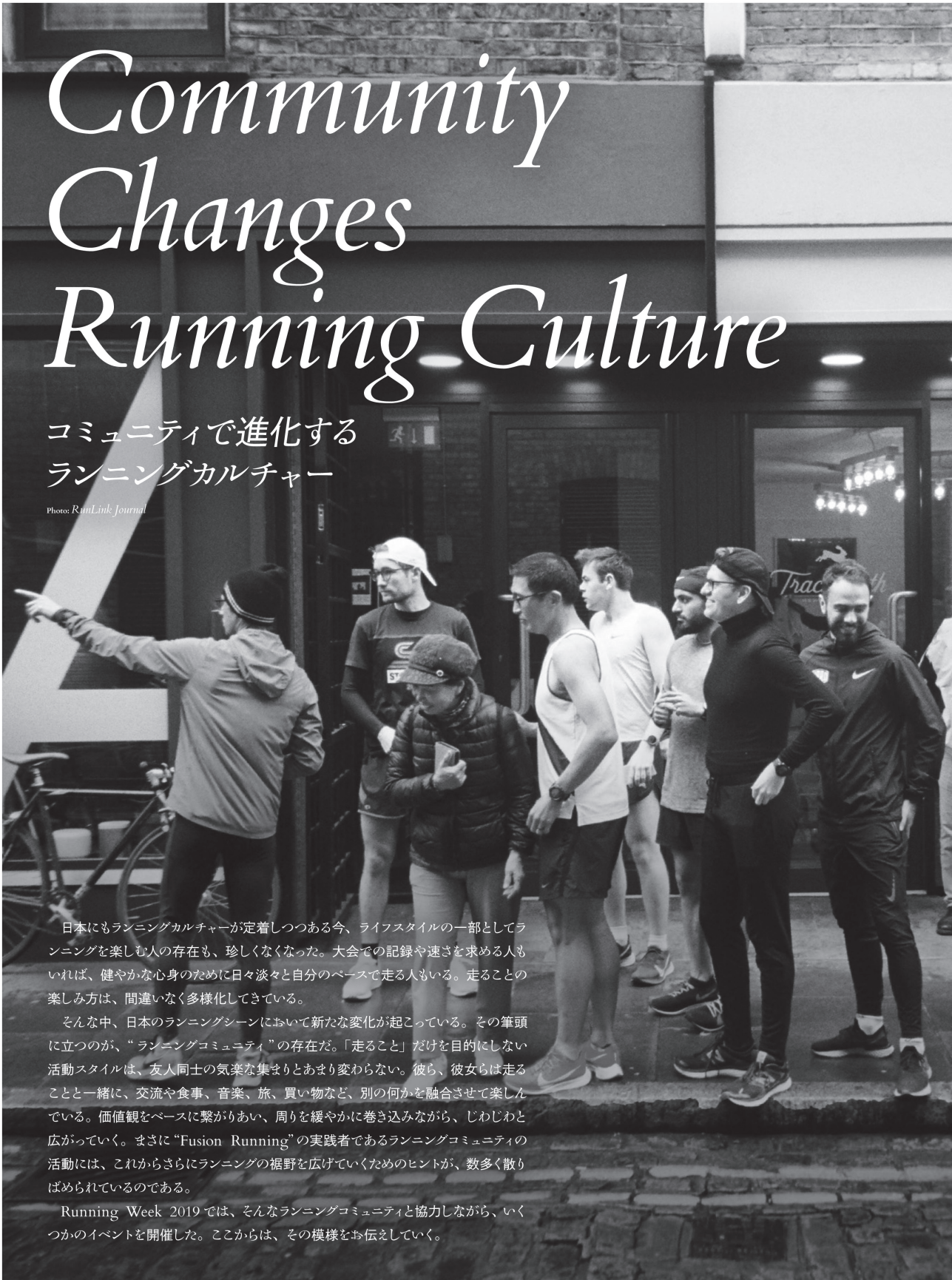
コミュニティで進化する
ランニングカルチャー

Photos: RunLink Journal

日本にもランニングカルチャーが定着しつつある今、ライフスタイルの一部としてランニングを楽しむ人の存在も、珍しくなくなった。大会での記録や速さを求める人もいれば、健やかな心身のために日々淡々と自分のペースで走る人もいる。走ることの楽しみ方は、間違いなく多様化してきている。

そんな中、日本のランニングシーンにおいて新たな変化が起こっている。その筆頭に立つのが、「ランニングコミュニティ」の存在だ。「走ること」だけを目的にしない活動スタイルは、友人同士の気楽な集まりとあまり変わらない。彼ら、彼女らは走ることと一緒に、交流や食事、音楽、旅、買い物など、別の何かを融合させて楽しんでいる。価値観をベースに繋がりあい、周りを緩やかに巻き込みながら、じわじわと広がっていく。まさに“Fusion Running”の実践者であるランニングコミュニティの活動には、これからさらにランニングの裾野を広げていくためのヒントが、数多く散りばめられているのである。

Running Week 2019 では、そんなランニングコミュニティと協力しながら、いくつかのイベントを開催した。ここからは、その模様をお伝えしていく。



Running Communities in Tokyo

ランニングをライフスタイルの一環として楽しむ人たちが集まり始めている。

新しい価値観を持ち、様々なスタイルを発信しながら活動している

ランニングコミュニティをいくつかご紹介。



adidas Runners Tokyo

「adidas」が主催するグローバルなランニングコミュニティ。各都市に配られたキャプテンを中心に、コーチによる本格的なランニングセッションやユニークなイベントを開催。自分をより高めるための場として多くの参加者が集まる。



Ikism

サブランナーでもある趣味ランナーの小林修人が発起人。「ランニングがあるライフスタイル」の充実を楽しむクリエイティブランニングクルー。グループランをせずそれぞれが自由に走り、カフェや居酒屋などで集まったときはラン談義や情報交換に花を咲かせる。



IGNITE TOKYO

東京を中心に活動するランニングコミュニティ。陸上競技経験のある実力者や、ランニング好きな男女がコア。少人数ながら、駅伝大会での入賞経験も豊富。海外のランニングコミュニティとのセッションを行うなど、活動の場を広げている。



AFE TOKYO

AFEとは「Athletics for East」の略。アメリカ西海岸の伝統的陸上競技クラブ「Athletics West」にインスピレーションを受け発足した。メンバーにはクイーターが多く仕事や趣味での交流も盛ん。「ランニングライフスタイル」をテーマに新しいカルチャーを生み出し続ける。



COMMON LANDSCAPE

「風景共有」をコンセプトにサブカルチャーを発信するランニングコミュニティ。2015年に発足し、名古屋を主な活動拠点としている。毎週木曜21時に鉄道に集まって走るのが定番。2018年には「COMMON LANDSCAPE TOKYO」も誕生した。



GO GIRL

ランをベースにアクティブなライフスタイルを送る女性のための、フットな会員制コミュニティ。モデルでモデルの三原勇希と、モデルで料理家の浅野美奈が発起人。マラソン大会出場を目標に、初年度会員の40名とともに、楽しく、定期的に練習会やイベントを行っている。



幡ヶ谷再生大学陸上部

「幡ヶ谷再生大学」(バンド「BRAHMAN」のTOSHLOWを中心とした仲間内のサークル)から派生した陸上部。「人間復興」のために走り、震災後は「復興支援のための体力づくり」も目的としている。それぞれの走りをアプリで共有しながら、自己鍛錬を重ねる。



BEAMS RUN CLUB

チームスタッフのみで構成される社内のランクラブ。それぞれのスタイルでラン＆セッションを楽しむつつも団体戦での上位入賞をはじめサブスリーや100マイラーも輩出。ファッションも遊びも走りも、やるからは本気で取り組むのがゲームシステム。



フィナムランニングクラブ

Webマガジン「HOYUHNHM (フィナム)」の読者や関係者によるコミュニティ。不定期開催のグループランにはプロの読者は誰でも参加可能。ランの後は打ち上げをするのが定番で、みんなで飲みながら交流することを楽しんでいる人も多い。



mellows

仕事やランイベントを通じて知り合い、もともと仲良かった同世代の女性たちが集まるクローズドコミュニティ。「ヘルシーなライフスタイル」を本気で、ララとその周りの人と共有することがゴール。一緒に食事したり遊びに行くのと同じ感覚で、日々のランを楽しむ。



Mikkeller Running Club Tokyo

デンマークのビールメーカー「Mikkeller (ミケラー)」が「おいしいビールを飲むためにも健康に」との思いで発足したコミュニティ。「毎月第一土曜日」の開催日は世界共通。日本では渋谷・道玄坂の店舗にて活動。走り終えた後、参加者にはビールが杯プレゼントされる。



RUMRUNCLUB

ドラマのnicoを中心に気の合う仲間を誘い合って集まったコミュニティ。ミーティングや投資、カメラや、飲食店経営者など、多様なメンバーが所属する。ランを連ては本業では出会えないような人とつながり、自分たちの活動に新しい視点や価値観を還元。



RED RUN CLUB TOKYO

「走るからには、速くなりた。走るからには、負けたくない」をモットーに、スピードとスタイルの両面を追求。フルマラソンからトライアスロンまで、各メンバーの目標レースに向けて、インターバル走やペース走、タイムトライアルといったトレーニングに取り組む。



LOL Run Crew

スポーツブランドのランニングコミュニティでベーターを務めた女性2人が立ち上げた30〜40代中心のランニングコミュニティ。LOVE OUR LIVES「自分たちの人生を好きになる」をコンセプトに、走ることで新しい「他ト」「モノ」「コト」に出会い、自己成長をすることが目的。



080TOKYO

ランニングを共通言語に、国籍、言語、職業が異なる様々なランナーが集うコミュニティ。20代前半のメンバーが中心で構成。世界での多様なランニングコミュニティと交流があり、過去には、韓国や日本のコミュニティを集めた大型イベントも主催した。

RUNNING DAY 開催報告

JAAF RunLink

【イベント概要】

RUNNING DAYは「#FirstTrack」をコンセプトに、普段なかなか走る機会のないトラックを走る楽しみを味わってもらうイベントを開催。22日（土）は主に未就学児を対象とした10m、50mのかけっこイベント、23日（日）は20代、30代の若者層を主な対象とした1000m、5000m記録会を開催した。残念ながらコロナウイルスの影響を考慮し、22日（土）のイベントは中止となったが、23日（日）は以下の通り開催をし、延べ307名が出場した。JAAF RunLinkの賛助会員である株式会社ニューバランス ジャパン、株式会社アダストリア、ロクシタンジャポン株式会社、Strava Inc.が本イベントに協力をいただいた。

【コロナウイルスへの対策】

また、コロナウイルスへの対応としては以下の対応を行った。

- ①入場ゲート、トイレに消毒液の設置。
- ②来場者への事前及び当日の感染予防対策および拡散防止の協力呼びかけ。
※使用媒体：WEB・twitter・3日前、前日メール配信・当日アナウンス
- ③感染予防・拡散防止のためにスタッフがマスクを着用

【賛助会員の活動】

〈株式会社ニューバランス ジャパン〉



・「GOGIRL presents Opening Session」の実施

〈株式会社アダストリア〉

- ・原宿 niko and...Tokyo 路面店にてPOPUP 展開
- ・2/20 niko and...Tokyoをベースにグループラン実施
- ・ランニングチーム Numerals、ゲストランナー、MC、スタッフ等、RD会場にてオフィシャルアパレル着用

〈Strava Inc.〉

Strava PB Challengeの実施

1000mと5000mのタイムトライアルでStrava上の自己PBを更新したランナーに、Stravaのオリジナルグッズのプレゼント企画を実施した。

〈ロクシタンジャポン株式会社〉

参加者全員に参加賞を提供いただいた。



大会観戦ガイド

第104回日本陸上競技選手権大会50km競歩 兼 東京2020オリンピック男子50km競歩日本代表選手選考競技会 第59回全日本競歩輪島大会 (斉藤和夫杯: 男女全日本10km競歩)

50km競歩の日本選手権が迫りました！日本トップウオーカーたちが東京五輪の日本代表を懸けて争います。熱い競演にご期待ください！

▼種目・スタート時間：

4月11日(土) 全日本競歩輪島大会

女子高校1・2年 3km競歩	12時20分
男子高校1・2年 3km競歩	13時00分
男子全日本10km競歩	13時40分
男子ジュニア10km競歩	13時40分
女子全日本10km競歩	14時40分
女子ジュニア10km競歩	14時40分

4月12日(日) 日本選手権

男子50km競歩	7時30分
※女子 50km競歩(オープン)	7時30分

4月12日(日) 全日本競歩輪島大会

女子高校 5km競歩	11時30分
男子高校 5km競歩	12時10分

▼コース：道の駅輪島ふらっと訪夢前往復コース・日本陸連公認競歩コース(1周2kmの往復コース)

▼アクセス(石川県輪島市文化会館付近)：

石川県輪島市文化会館は「道の駅輪島」ふらっと訪夢前。

- ・能登空港からふるさとタクシーを利用。能登空港発着便に合わせて利用可能(要予約)。予約先 港タクシー TEL：0768-22-2360
- ・能登空港より特急バス約20分「輪島駅前ふらっと訪夢」下車
- ・「金沢」駅より特急バス約120分「輪島駅前ふらっと訪夢」まで



昨年度の大会より

▼問合せ：輪島市教育委員会生涯学習課スポーツ推進室
全日本競歩輪島大会実行委員会事務局
TEL：0768-23-1176

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1436/>

第22回長野マラソン

1998年に開催された長野冬季オリンピックを記念して1999年より開催の長野マラソン。エムウェーブ、ホワイトリンク、ピックハットなどのオリンピックが開催された会場前を通るコースに、10,000人が集います。

▼日時：4月19日(日) 8時30分スタート

▼コース：長野マラソン長距離競走路

(スタート) 長野市吉田・長野運動公園

(フィニッシュ) 長野市篠ノ井東福寺・長野オリンピックスタジアム

▼アクセス：

・長野運動公園

しなの鉄道北しなの線「北長野」駅下車、徒歩約20分
長野電鉄「朝陽」駅下車、徒歩約15分
長野電鉄バス「運動公園」下車

・長野オリンピックスタジアム

JR篠ノ井線、しなの鉄道線「篠ノ井」駅東口より、徒歩約30分
長野駅・篠ノ井駅よりシャトルバス

▼問合せ：長野マラソン大会組織委員会事務局

TEL：026-217-2490(受付時間：平日9:30～17:00)

▼日本陸連WEB内大会ページ：

<https://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1437/>

▼大会公式サイト

<https://www.naganomarathon.gr.jp/>



昨年度の大会より



JAAF SHIGA

一般財団法人滋賀陸上競技協会

〒520-0037 大津市御陵町4-1 皇子山陸上競技場内2-1室
TEL.077-527-3925 FAX.077-527-3925
http://www.biwako.ne.jp/~srkshiga/

東京オリンピックまで半年を切り、滋賀県出身の桐生祥秀選手(日本生命)は合宿に入り、シーズンに備えたトレーニングに励んでいるというニュースが流れていました。

また、滋賀県開催の2024年国民スポーツ大会まであと4年となりました。滋賀県の対策本部においては、施設整備、強化対策の具体的な方策も徐々に明確化されつつあります。

さて、昨年の茨木国体では天皇杯44位と惨敗を喫しました。しかしながら、1月12日・19日に開催されました男女都道府県対抗駅伝競走大会では女子が23位、男子が20位と大変健闘してくれました。令和2年の競技力向上に向けての魁となりました。

令和2年度のシーズンを迎えるにあたっては、東京オリンピックでの桐生選手の活躍と鹿児島国体での滋賀県勢の躍進を大いに期待するものです。

結びになりますが3月の理事会、6月の評議員会において令和2年度の事業・予算を承認いただく運びではありますが、やはり、会員皆様のご理解をいただき、ご協力を賜りながら推進していく所存であります。令和2年度も変わらなくよろしくお願い申し上げます。

(文責:専務理事 坂一郎)

JAAF OSAKA

一般財団法人大阪陸上競技協会

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-1 ヤンマースタジアム長居内
TEL.06-6697-8899 FAX.06-6697-8766
http://www.oaaa.jp/

OSAKA 夢プログラム事業報告 - 2020 TOKYO へ -

郷土大阪からオリンピック選手を!!との合言葉の下、地元経済界や陸上ファンのご支援を受け平成27年にスタートした弊会の特別強化事業「OSAKA 夢プログラム」は、いよいよオリンピック代表選手選考に向けた最後のシーズンに入ります。昨年7月のダイヤモンドリーグ2019 ロンドン大会において9秒98同をマークした指定競技者の小池祐貴さん(住友電工)に続き、1月の大阪国際女子マラソン大会においてマラソン・グランドチャンピオンシップ・ファイナルチャレンジ設定記録を破る2時間21分47秒をマークして優勝した松田瑞生さん(ダイハツ工業)も、あと1枠となっている女子マラソン選考レースのトップ集団に入っております。短距離の多田修平さん(住友電工)は、WA.INDOOR TOUR MADRID.男子60m決勝において6秒56をマークし自己新記録を樹立しました。やり投の佐藤友佳さん(ニコニコのり)は、南アフリカで合宿に入っておりACNW League Meeting 女子やり投において60m台のスローを見せるなど元気いっぱいです。川田彩夏さん(東大阪大学)も調子を上げつつあり、2月23日開催された2020 Sir Graeme Douglas International Continental Tour Douglas Track & Field, Auckland 女子800mにおいて、強風のコンディションの中2分09秒08をマーク、シーズンインに向け手ごたえをつかんだようです。大阪では5月16日~18日に第68回全日本実業団対抗陸上競技選手権大会、6月25~28日には第104回日本陸上競技選手権大会がヤンマースタジアム長居にて開催されます。皆様のご協力ご支援をお願い申し上げます。

(文責:讃岐)

JAAF KYOTO

一般財団法人京都陸上競技協会

〒615-0872 京都市右京区西京極南衣手町57番2
TEL.075-322-5500 FAX.075-322-5501
http://www.krk26.jp/

2月16日(日)に「京都マラソン2020」を開催しました。雨模様のためびしスタジアム京都を15,211名のランナーが午前9時にスタート。93.9%のランナーがフィニッシュの平安神宮まで完走することができました。

男子は渋川裕二選手(群馬県 前橋市陸協)が2時間21分48秒で優勝。女子は大前千晶選手(神奈川県 GRlab 関東)が2時間45分25秒で優勝しました。山中伸弥京都大学iPS細胞研究所長や西脇隆俊京都府知事も完走し、出場したランナーと喜びを分かち合っていました。

(文責:広報・情報処理部長 相模浩史)



仁和寺前を通過する選手と沿道からの声援



丸太町通折り返し

写真提供: 京都マラソン事務局

JAAF HYOGO

一般財団法人兵庫陸上競技協会

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号
神戸市生涯学習支援センター内
TEL.078-231-1771 FAX.078-231-1772
http://www.haaa.jp/index2.html

新型コロナウイルスの関係で、全国各地でマラソン中止の報道が続いています。本県でも5大会中残り2試合(主催)が中止になりました(世界遺産姫路城マラソン2/23・丹波篠山ABCマラソン3/1)。国内で新型コロナウイルスの感染が広がっている現状を踏まえ、競技役員・ボランティアスタッフ・市民・ランナーの皆様の安全・安心を最優先し、やむなく中止せざるを得ないと判断に至りました。出場予定の選手にとっては、本当に残念だと思います。2020年度もよろしくお願いいたします。

第103回日本陸上選手権大会男女20km競歩大会が、六甲アイランド甲南大学公認コースで2月16日に開催されました。東京2020オリンピック選手選考競技会として、実施されました。男子 山西利和(愛知製鋼)1時間17分36秒で初優勝 女子 岡田久美子(ビックカメラ)1時間29分56秒で6連覇と共に東京オリンピック内定を勝ち取りました。また、U20選抜競歩大会では、男子 萬壽春輝 女子 藪田みのりの、兵庫県選手が優勝しました。

第9回神戸マラソンが11月16日に開催されました。参加者20320人完走率95.7% 沿道には、61万人の切れ目のない応援を受けて、快適に走ることができたと思います。今大会は、シルバーラベルをめざし海外選手を招聘しました。男子2時間8分46秒大会新 女子2時間27分39秒大会新とハイレベルの大会となりました。

2019年度強化関係では、茨城国体 天皇杯2位 皇后杯1位 全国都道府県対抗駅伝競走大会男子2位 女子6位と大変頑張ってくれました。

事務局からのお知らせ

◆◆セイコーゴールドングランプリ陸上2020東京 キービジュアル公開◆◆

詳細はこちら▶<http://goldengrandprix-japan.com/2020/news/article/13514/>

大会動画はこちら▶https://www.youtube.com/watch?time_continue=4&v=YHj0gFZRzVo&feature=emb_title

【公式SNS】

Twitter @goldengrandprix

Facebook 陸上 : <https://www.facebook.com/goldengrandprix>

◆◆メールマガジン配信中!◆◆

日本陸連公式メールマガジンを好評配信中です。

登録は<https://www.jaaf.or.jp/mailmagazine/>か、右のQRコードから!



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩 (陸連会長)
友永 義治 (陸連副会長)
八木 雅夫 (陸連副会長)
尾縣 貢 (陸連専務理事)
麻場 一徳 (陸連強化委員長)
風間 明 (陸連事務局長)
牧野 豊 (陸上競技マガジン編集長)

◇時報編集室責任者

大嶋 康弘
◇時報編集担当
繁田 進
石塚 浩
木越 清信
宮田 宏
廣瀬 静香

陸連時報編集室

〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-2
JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 9階
日本陸上競技連盟内
TEL : 050-1746-8410
FAX : 050-3588-1869